

第7回松蔭読書会 2016年7月19日(火)

『そして誰もいなくなった』

(アガサ・クリスティー著 青木久恵訳 ハヤカワ文庫)

前回の読書会の課題図書『ドS刑事 風が吹けば桶屋が儲かる殺人事件』に登場したアガサ・クリスティーの『そして誰もいなくなった』が投票の結果、今回の課題図書に選ばれました。

ですが……。なんと、残念ながら今回は参加希望者がゼロ。いつも参加してくれている生徒のみんなも、部活などが重なってしまい来られないということでした。とても残念ですが、せっかくなので、司書4人で感想などをあれこれ話し合ってみました。

読んだ感想は？

- ・あんな風に招待されて、みんな集まるのが驚き。危機管理意識がなさすぎる！
- ・最後まで犯人が誰だか分からなくて面白かった。でも少し犯人の予定通りにうまく進みすぎ?!のような感じも。 予定通りに進むように犯人が人を上手く選んでいるのでは、という意見も。
- ・読みながらハラハラした。登場人物の心情の描き方が印象的。
- ・みんなが一番隠したい過去の部分をこんなに調べあげられる?!
- ・古い時代だからこそ成立するのでは?!
- ・探偵など誰かが事件を解いていくのではなく、誰も事件を解かずに物語が進んでいくところが珍しい。
- ・3人ずつぐらいで行動すればいいのにと考えた。1人になるから殺されちゃう…。
- ・マザーグースの唄には、残酷なものもある。

この物語にでてくるマザーグースの唄は、メロディーが思い浮かばない。

ちなみに、この唄 "Ten Little Nigger Boys Went To Dine" は、北原白秋が『まざあ・ぐうす』(1921年)に載せている訳が、日本での初訳だそうです。

(『保存版 名作マザーグース70選』藤野紀男著 三友社出版 1989年より)

本作と同じ密室殺人で思い浮かぶ小説は？

- ・『仮面病棟』(閉鎖された病院で繰り広げられるミステリー)
- ・『インシテミル』(超多額の賞金をめぐり、密室の中の男女が殺し合う殺人ゲーム)

犯人が意外だった小説は？

- 『オリエント急行殺人事件』 『容疑者Xの献身』 『アクロイド殺し』 『流星の絆』
- 『その女アレックス』 『Yの悲劇』

映画を観たという司書からは、結末が小説とは違っていたというお話も。登場人物の設定の違いなどのお話もあり、映画もぜひ観てみたいと思いました。

次回の読書会は2学期末の予定です。課題図書はまだ決まっていますが、最近図書館をよく利用してくれている中1の生徒さんたちにも来てもらえるような本を選びたいと思っています。